

■ 学校の共通目標

授業作り	重点	個に応じた指導を取り入れ、一人一人の可能性を広げる授業づくり ・見通しをもち、既習事項を生かしながら、児童が主体的に取り組めるように授業構成を工夫する。 ・一人一人の力に合わせた基礎的学習にタブレット端末を活用したり、友達の様々な考え方を通して協働的に学ぶ場面を設定したりし、児童が主体的に学び、学ぶことを楽しめる授業にICTを活用する。	中間評価	新宿区教育課題研究校として、テーマ「個別最適な学びと協働的な学びの展開—多様性を生かす指導の充実—」を研究したことによる授業改善が見られた。 ・児童が主体的に取り組むマイプラン学習の提案 ・導入時に既習事項を振り返る等の授業構成の工夫 ・習得のためのデジタルドリルの活用 等	最終評価	タブレット端末の活用に加え、「話す」「聞く」「読む」「書く」学習を、どの学年も意図的に取り入れるとともに、単元の見通しをもたせる授業づくりを、校内研究を通して学校全体で取り組んできた。新宿区学力定着度調査の結果、因果関係の捉えや、情報の扱い方などの力に課題があったので、今後も、主体的・対話的で深い学びができる授業改善に取り組んでいく。
		多様性を認め合い、共に学び合うことができる環境づくり ・児童の個性を大切にし、互いの違いを認め合いながら、多様な考えの交流ができる学級環境をつくる。 ・ICTの活用と共に、書くことや話すことなどの言語活動や、実際の体験を通して学ぶことを大切に考えたカリキュラム・マネジメントを行う。		ICTの活用と、協働的に学んだり体験的に学んだりする時間を、ベストミックスした環境づくりが意識されるようになった。言語活動を見直したことで、全国学力・学習状況調査において国語「話し合い・伝え合い」のポイントが上がった。		児童の学習環境は、この1年でタブレット端末や、デジタル教科書等が特別なものではなく、日常的に活用されるようになってきている。今後は、家庭との連携を図り、家庭学習の充実とともに、基礎的な学力の定着を図っていくことで、個別最適な学びをさらに展開していく。

■ 学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10月）	課題（10月）	改善のための取組（10月）	最終評価（2月）	
1	国語	学話すことを楽しみ、意欲の高い児童が多い。反面、友達や指導者の話を聞く場面になると、集中することが難しい。 学拗音、促音、撥音や「は、へ、を」の表記を苦手としている児童がやや多い。	・話し手の方を見て、最後まで集中して聞くこと。 ・拗音、促音、撥音の表記や「は、へ、を」を正しく書けること。 ・既習の平仮名、片仮名、漢字を正しく書くこと。	・できるだけ短く3文程度で簡潔に話す練習をする。話を聞く前に、聞き方のポイントについて話をする。 ・丁寧に視写をする時間を設ける。 ・プリントやタブレット端末を利用したドリル学習で習熟を図る。	・話すことについては、国語で学習した内容から、伝えたいことを始めに言い、理由などを後に付け加えて話す習慣が身に付いた。聞くことについて、話している人に視線を向けて聞くという姿勢は、都度の声かけで意識するようになったが、ポイントに注意しながら最後まで集中して聞くことは、今後も指導を継続していく。 ・「は、へ、を」などの文字は、正しく書けていることを意識する児童が増え、正しい文字の表記が定着してきた。漢字の学習は、家庭学習との積み重ねで8割以上の児童が正しく書けるまで定着した。	
	算数	学繰り上がり、繰り下がりのない計算についてはおおむね定着している。繰り上がりのたし算の学習では10のまとまりをつくるのが難しく、正しく計算できない児童がいる。 学文章を読むことが苦手な児童、文章理解が難しく問いに正対して答えられない児童が多い。	・10の合成・分解が確実にできること。 ・文章題で問われていることを正しく読み、絵や図に具体化して考えること。	・数の概念が定着していない児童については、算数ブロックや20玉そろばんを使いながら、数の合成・分解が視覚的に理解できるようにする。 ・文章題の大切な言葉や数に下線を引き、絵や図で文章題の内容を視覚化した後に立式するよう、手順を示す。	・10の合成・分解、繰り下がりのあるひき算の計算は、算数ブロックで表したことを図で表す指導により、自分で考えて答えを導き出せるようになってきた。また、個に応じた指導を行い、計算の力を高めた。 ・文章問題では、場面を理解し、その内容を図で表した後に立式する指導を繰り返し行った。自分の力で図を描き、式を導き出すことが難しい児童には、タブレット端末等を活用した視覚的な支援を行った。	
学年	教科	学習状況の分析（4月）	課題（4月）	改善のための取組（4月）	中間評価・追加する取組（10月）	最終評価（2月）
2	国語	学漢字学習に対しての意欲は高いが、既習の漢字を文章の中で使うことはまだ難しい。 学片仮名を正しく書いたり、使ったりすることや、拗音・促音を正しく使うことのできない児童がいる。 学話し合い活動では、積極的に話す児童と自分の思いや考えをうまく伝えられずに黙っている児童がいる。	・文字や言葉を正しく書くこと、相手に伝わるように文章を書くこと。 ・既習漢字、片仮名を文の中で正しく使うこと。 ・話し合い活動で自分の思いを発信できるようになること。	・書く活動を日常的に取り入れて、書くことへの抵抗を減らす。丁寧に見取り、言葉の表記は個別に指導を入れていく。 ・家庭学習で漢字や片仮名の定着を図る。 ・話型提示をして、自信をもって話すことができるようにする。	・授業内で書く学習を日常的に取り入れ、日記を家庭学習として取り組んだことにより、文章を書くことへの抵抗感が減ってきた。また、書いた文章を交流することで、よいところを見つけ合い、文章を書く力が伸びてきた。 ・既習漢字や片仮名は、日常的に文の中で使えるようになっていく。 ・引き続き授業中などに、意見交流の場を多く取り入れ、話すことへの抵抗感を減らしていく。	・論理的な文章に取り組ませるのは、文例を示しても難しかった。 ・160文字の漢字を学習したが、その定着率には、差が出ている。宿題などの家庭学習にこつこつ取り組む児童は定着率が高かった。 ・グループでの発表活動に意欲的に取り組んだ。その中で、児童同士がテーマについて意見を交換したり、話型を教え合ったりする協働的な姿が見られた。
	算数	学加法・減法の計算は、おおむね身に付いている。 学文章題の場面理解が難しい。 学繰り上がり、繰り下がりのある計算につまずいている児童が2割程度いる。	・繰り上がり、繰り下がりのある加法減法等の基礎的な力を身に付けること。 ・文章を読み、課題をつかんで立式ができること。	・プリントやタブレット端末のデジタルドリルを利用して、反復練習を行い、基礎基本の計算の定着を図る。 ・文章題を解く際に、加法減法の決め手になる言葉を確認し図などを参考に、正しく立式することができるようにする。	・反復練習をすることで、基礎的な内容は定着してきた。時間が経つと忘れてしまう児童もいるため、家庭学習を含め繰り返し取り組んでいく。 ・文章題は、決め手になる言葉に着目して、正しく立式することができるようになってきた。	・四則計算のプリントに毎回取り組ませることで、計算力の向上が見られた。 ・文章題では、図を描くことで、イメージがしやすくなる様子が見られた。

3	国語	<p>学話したり聞いたりすること、読むことへの関心は高い。</p> <p>学既習の漢字をすすんで文章の中で使うことが困難な児童が多い。</p> <p>学書字に困難があることから、学習への意欲が低い児童が数名いる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 正しい文字の書き方や語彙力を高めること。 伝えたいことを、話したり、文章で書いたりすることに慣れ、その力を生活で役立てること。 書字に対しての苦手意識をなくし、書くことを楽しむようにすること。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の学習時間や国語の時間での読書量を確保し、主体的に読もうとする態度を育てる。 話したり聞いたりすることへの関心が高いことから、友達と相互にアドバイスをし合える場面を増やし、学び合いのできる児童を育てる。 プリントやドリル学習で既習漢字の定着を図り、生活の中ですすんで使おうとする児童を賞賛する。 前学年での既習事項について、視写プリントやタブレット端末のデジタルドリルを利用しながら定着を図り、繰り返し練習をすることで身に付けられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題が早く終わった児童から意見を交換する時間をとることで、すすんで学び合おうとする児童が多くなっている。今後も継続して取り組んでいく。 前学年の既習事項や第3学年の新出漢字が身に付いていない児童が見られるので、視写プリントやタブレット端末、その他漢字学習の方法などそれぞれの児童に合う方法で指導していく。 デジタルドリルを宿題として活用し、繰り返し練習を行うことで基礎学力の定着を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 新宿区学力定着度調査の結果、区平均と比較すると漢字の書きに関しては10ポイント以上、情報の扱い方に関しては14ポイント以上、文学的な文章に関しては10ポイント近く低いことが分かった。 漢字の学習では、熟語や例文づくりなどに取り組む指導をしたが、日常的に漢字を使用して文章を書いたり、繰り返し練習したりする取組が必要である。 語彙の少なさや言葉の意味を誤って認識している児童が多く見られる。日常的に辞書を活用し、語彙を獲得しながら具体的に思いや考えを伝えられる学習場面を設定していく。 意見を交換する際に、言ったり聞いたりすることで満足している児童も多い。情報を比較したり、分類したり、検討したりする中で多面的に物事を捉えていくことを習慣化できるようにしていく。 文章を具体的に書くことができるようになってきている児童が多い。書き方が分からない児童には、例文をヒントとして書かせることが有効だった。
	算数	<p>学加法・減法の計算、かけ算九九についてはおおむね身に付けている。</p> <p>学文章題の場面理解がまだ難しい。</p> <p>学10を一まとまりの単位として見るのが難しく、筆算の繰り上がりにつまずいている児童が数名いる。指を使って計算する児童も1割ほどいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 3桁の繰り上がりや、繰り下りの計算ができるようにすること。 かけ算やわり算の筆算の仕方を身に付けること。 	<ul style="list-style-type: none"> プリントやタブレット端末のデジタルドリルを利用して反復練習を行い、基礎基本の計算の定着を図る。 具体物を用いる場面を意識的に設定し、数量の概念をもつことができるようにする。 筆算が確実にできるよう、声に出して唱えながら筆算の手順を身に付けられるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 3桁の筆算のノート指導や手順の指導を丁寧に行ったので、繰り上がり繰り下りのある3桁の計算の理解が定着した。今後も計算問題を継続的に行う。 かけ算の筆算やわり算の練習問題を継続的に行った結果、九九で間違える児童が減った。九九暗記100%を目指す。 測定の学習では具体物を使って活動したので、量の感覚が身に付いた。今後も実際に、重さの測定や図形の作図等、具体物で体験する活動する時間を確保して量の感覚を養ったり技能を高めたりしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 新宿区学力定着度調査の結果、区平均と比較するとわり算や時刻と時間に関しては10ポイント以上、図形や長さに関しては6ポイント近く低いことが分かった。 わり算については、かけ算九九を苦手と感じている児童がいる。また、文章問題から立式することも難しい。宿題(デジタルドリル)やプリント等で繰り返し指導する必要がある。 抽象的な概念を捉えたり、考えたりすることが困難な児童が多い。具体物や半具体物を使用して定着を図る。
4	国語	<p>学書くことができる文章の量に差がある。</p> <p>ノート、提出物など、平仮名ばかりの文を書く児童が多い。指示を何度も聞き返す児童や、聞き返しはしないが理解していない児童がいる。また、問題と正対していない発言や話し合いをする児童がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作文帳や手紙などに、伝えたいことや体験したことを書く力を高めること。 文章で、句点や読点を適切に使うこと。 既習漢字を想起し、生活の中でも使える力を高めること。 話すこと、聞くことへの興味と関心を高めること。 	<ul style="list-style-type: none"> 書く内容を共に考えたり、よく書けている児童の作品を参考にさせたりする。 適切に句読点を打つ学習や、推敲する学習を通して、身に付けさせる。 デジタルドリルを活用して身に付けさせる。 指示をなるべく短くし、聞くことや話すことに重点を置いた教材を用いて指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会科の学習でも手紙を書く機会を設けた。そこでは、体験をもとに自分の素直な感想や、具体的な視点をもつ児童が増えた。 ロールプレイングや、学級会など具体的な場面設定があるので、話すこと、聞くことへの関心は高まった。 デジタルドリルを学期のまとめとしても活用した。 パンフレットの作成や、デジタルソフトで互いのカードを読み合い、句読点の扱いへの意識を高めさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手意識が明確な単元の場合は、作文でも手紙でも発表でも、意欲的に取り組む姿が見られた。その際、既習漢字でも平仮名ですませてしまう児童が少なくない。漢字や言葉の定着率も低い傾向が顕著なので、添削時に漢字に直す支援を継続した。 デジタル教材の活用は友達の作品を読もうという意識を高めるには有効だった。一方で、キーボード操作が難しい児童に対しては、キーボード操作の習熟の時間を確保する必要がある。
	算数	<p>学意欲的に取り組むが、早く解こうとするためか、計算や問題文の読み間違いといったケアレスミスがよく見られる。</p> <p>わり算の筆算や、面積、がい数など、抽象的な考え方を求められることが増え、個に応じた指導が必要となる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 集中して、計算に取り組み、かけ算やたし算の正答を見いだすこと。 個別最適な学習に工夫すること。 	<ul style="list-style-type: none"> デジタルドリルなどを活用してかけ算九九の復習をさせる。 桁をそろえる等、筆算を丁寧に書くように指導する。 一斉指導だけでなく、少人数や個別指導などを取り入れていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の理解度が低いときは、時数を増やして習熟の時間を設けたことで理解が定着するようになった。今後も児童の実態に対応して指導していく。 問題解決の場面で、友達の考えや複数の解法を比べる活動を通して、協働的な学びができた。今後も問題解決の授業や算数的活動を取り入れて、柔軟な考え方を養っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 四則計算については、児童の実態に合った計算プリントやデジタルドリルで個別に学習することで自分の目標に向かって意欲的に取り組む児童の姿が見られた。 問題解決学習では、図を自分で描くことで、問題の意味や、数の量的概念を捉える力が付いてきた。

	国語	<p>調問題の内容別正答率を見ると、「話し合いの内容を聞き取る」「言葉の学習」「文章を書く」の正答率において、区の平均正答率を下回った。特に「文書を書く」の平均正答率は著しく、区の平均正答率に対して 13.7 ポイント下回っていた。</p> <p>学授業内の成果物の内容を見ると、思考したことを文章に書き表すことを苦手としている児童が多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に取り組む児童と、意欲がもてない児童の差をなくすこと。 ・書くことへの力を高め、生活の中で書く力を生かすこと。 ・語彙力に課題がある児童への個別指導を行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の学習に対する興味・関心を引き出せるような授業展開や個に応じた指導をする。 ・行事の感想や作文、体育カードなどで目的意識をもって日常的に文章を書く活動を取り入れる。その際、文章構成を考えたり、事実と自分の考えを分けたり、伝えたいことを明確にしたりできるよう指導する。 ・自分の思いや考えをためらわずに表現できるように、国語的な言い回しを提示して文章で表現ができるようにしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習での意見交流やタブレット端末での学習、資料提示などを取り入れた。「見る・聞く・活動する」のメリハリを付けることで課題に対して最後まで粘り強く取り組むことができるようになってきた。視覚的要素を取り入れ、活動や体験を確保した授業展開を行っていく。 ・書く活動に対して、抵抗感を示す児童がだんだんと減ってきている。例文を提示することや文章構成（起承転結）を細かく考えること、経験や体験と自分の考えを踏まえた感想文を書くことで自信をもって活動できた。また、ミニ作文や振り返りに取り組むことで徐々に書く力が身に付いてきた。 ・例文や教科書巻末「言葉のたから箱」のページを提示しながら授業を展開してきた結果、自分の思いや考えを具体的に表現できるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習での活発な意見交流を通して、より教材を読み深める姿が見られた。また、「見る・聞く・活動する」を通して、見通しをもって学習に取り組む児童が多く見られた。 ・例文を提示することや文章構成（起承転結）を細かく考えることで安心して意欲的に取り組む児童の様子が見られた。また、身近な課題に対し、説得力のある意見文を書くことができるようになった。 ・自分の思いや考えを経験や体験を踏まえながら表現できるようになり、伝えたいこと具体性が出てきた。しかし、叙述をもとに記述することには、個人差が感じられる。
5	算数	<p>調問題の内容別正答率を見ると、「データの活用」の正答率は目標値を 5 ポイント以上上回っていた。一方で、「数と計算」「図形」「変化と関係」の正答率においては、区の平均正答率を下回った。</p> <p>学家庭学習や授業内での練習問題の取り組みを見ると、余りのあるわり算の計算方法や作図の仕方、変化と関係の考え方の定着に差が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎基本の計算スキルを定着させること。 ・習熟度に応じた指導が必要であること。 ・計算を問題場面で活用できるように、生活経験と結び付け、文章問題の場面を理解して、問題に取り組むこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項の振り返りや、ドリル、タブレット端末のデジタルドリルを活用することで問題を解く経験を多く積ませる。 ・習熟度別算数指導の展開や日々の家庭学習を通して問題や量を選択して取り組めるようにする。 ・文章問題では大事な部分に線を引かせる。また、立式の際は、図や言葉を用いる活動や指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時で学習したことを授業導入時で振り返ることや、苦手な単元をドリルやデジタルドリルで復習することで、東京ベーシック・ドリルの正答率が 3 ポイント上昇した。今後も、デジタルドリルやタブレット端末を活用し、個別最適な学びを充実させていく。 ・習熟度別に指導方法を工夫しながら指導に当たった。解く問題数の調整や既習事項を導入時に振り返ること、問題解決まで至る児童が少しずつ増えた。 ・問題文の大事な部分だけに線を引かせるだけでなく、図や表、イラスト、図形の模型を用いて指導に当たった。その結果、問題文の意味の理解が向上し、正しい立式や計算ができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ドリルやデジタルドリルを活用してきたが、新宿区学力定着度調査の結果から、「整数の計算」の正答率に大きな差が見られた。引き続き、学習したことを復習できよう家庭学習やプリント、デジタルドリルに取り組ませる必要がある。 ・問題解決の過程で、学習したことが断片的な学びとにならないよう前時を振り返りながら授業を行った。そのような既習事項の振り返りは、思考を促すことにつながった。しかし、同調査の結果から「思考力・判断力・表現力」の項目が、区平均より 8.4 ポイント下回った。解決まで到達できる基礎的・基本的な学力向上が課題である。 ・ドリルやデジタルドリルを活用してきたが、同調査の結果から「立体図形」の正答率に大きな差が見られた。既習事項を掲示物等を用いて振り返ることや、映像教材、実物を用いた授業を工夫していきたい。
6	国語	<p>調教科の正答率が、区平均正答率を 3.5 ポイント下回っている。特に「話すこと・聞くこと」領域においては、区の平均を 6.1 ポイント下回っている。</p> <p>調問題の内容別正答率を見ると、「言葉の学習」、「物語の内容を読み取る」において区平均を上回っていたものの、「話し合いの内容を聞き取る」、「漢字を書く」においては区平均正答率を 5 ポイント以上下回っていた。</p> <p>学漢字を正しく書くことはできるが、同音異義語などで誤りが多く見られ、漢字や熟語の意味も含めて習得できている児童は少ない。</p> <p>学少人数グループで話し合う活動にはどの児童も取り組んでいるが、全体指示や児童の発表を聞く際に指示を聞き漏らしたり発表の内容を適切に理解できていなかったりする児童が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話の目的や大筋を捉える方法を身に付け、話の内容を明確にするための話し合いの工夫について理解を深めること。 ・第 5 学年までに配当されている漢字を適切に使用できるようにすること。 ・文章の中で適切な漢字を使用して書くこと。 ・学年相応の語彙力を獲得すること。 ・話の内容を短くまとめたり、要点を聞き取ったりといった聞き方を身に付けること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語のみでなく、他教科の学習においても話し合い活動を多く取り入れ、話し合いの行い方や工夫について理解を深める。 ・新出漢字の学習において、熟語や使い方をふまえて文章を考えるなど、活用の機会を設ける。また、第 5 学年までの漢字に関しても、定期的に復習の機会を設ける。 ・年間を通じて、文章読解の際に初見の言葉や意味の分からない言葉を抜き出し、国語辞典で意味を調べる活動を取り入れる。 ・全校朝会の内容やスピーチの内容を短くまとめるなど、日常的に話の内容を短くまとめ、要点を聞き取れるよう意識付けを図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習や学校生活の様々な場面において、話し合い活動に力を入れ指導を行っている。令和 4 年度全国学力・学習状況調査では、平均正答率が国及び都の平均を上回ったほか、特に話し合いや伝え合いに関する設問では正答率が軒並み上回る結果となった。 ・第 6 学年の新出漢字について、前期の単元末の評価テストでは漢字に関する問題の正答率が 85%であった。一方で、第 5 学年の漢字の読み書きについて正答率が下回っている設問があったため、継続して下学年の漢字の習熟を行う。 ・辞典やタブレット端末を活用した授業を実施している。前期の単元末の評価テストでは、言葉に関する正答率が 88%であった。漢字の習得と並行して語彙力の獲得も継続していく。 ・要点や要約については、一定の技能が身に付きつつある。後期は、要旨のみでなく、構成や全容を捉えることも意識させ、「聞くこと」の向上と情報処理力を伸ばしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新宿区学力定着度調査の結果、平均正答率は全国を上回ったものの、区を 4.6 ポイント下回った。特に、「話すこと・聞くこと」領域においては、会話の中からは出来事の因果関係を捉える問題や、質問の内容から質問者の意図を類推する問題において誤答が多く、話の内容や構成を適切に捉えることが課題である。 ・年間を通じて取り組んだ漢字テストについては、正答率が回を重ねるごとに上がったものの、同調査の結果では、漢字の読み書きにおいても、区の正答率を下回っている設問があった。短期的には覚えていても、習得までには至らなかった。 ・後期の単元末の評価テストでは、言葉に関する正答率が 92%であった。同調査においても「情報の扱い方」と「言語文化」の単元では、区の正答率を上回るなど、効果が見られた。 ・全容を捉えることは身に付きつつあるが、構成や因果関係等を捉えるまでには至らなかった。

	算数	<p>調教科の正答率が、区の平均を 1.8 ポイント下回っていた。特に「図形」領域では 3.2 ポイントの差があった。</p> <p>調問題の内容別正答率を見ると、概ね区の平均正答率と同程度だが、「分数と小数」で 4 ポイント、「図形の角」では 7 ポイント以上の差が見られた。</p> <p>学家庭学習や練習問題の取組を見ると、基本的な四則計算は身に付いているものの、あまりのあるわり算や小数のかけ算・わり算、通分が十分に身に付いていない児童が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 多角形の内角の和や合同な図形の性質を正しく理解し、応用して問題に取り組む力を高めること。 分数と小数の大きさを比べるために、小数を分数の形に直したり、分母を決めて適切に通分したりすることができること。 筆算の仕方を定着させ、位に気を付けて処理することができること。 	<ul style="list-style-type: none"> ICTを活用すると共に、実物等を操作しながら、体験的に理解を深めるようにする。 家庭学習において、プリントやタブレット端末のデジタルドリルを活用することで、問題を解く経験を多く積ませる。 授業や家庭学習において、タブレット端末のデジタルドリルを活用することで個別に最適化された問題に取り組ませ、学習内容の習熟を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 前期の「図形」領域単元末に実施した評価テストの平均正答率は 8 8 %であった。一方で、令和 4 年度全国学力・学習状況調査では、「図形」領域において正答率が国及び都の平均と同等か下回った設問があったため、後期も継続した取組が必要である。 タブレット端末の活用により、平均正答率が国及び都の平均を上回った。また、前期の単元末の評価テストにおいても平均正答率は 8 5 %であった。後期も、デジタルドリルやタブレット端末を活用し、個別最適な学びを充実できるように、学習を展開していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 同調査の結果、「図形」領域における正答率は、全国平均正答率を 5.9 ポイント上回ったものの、区正答率を 1.9 ポイント下回っていた。特に、対称の軸を作曲する問題の正答率では区や全国平均正答率を下回るなど、課題が残った。 同調査の結果、「データの活用」領域では正答率が区平均正答率を上回るなど、タブレット端末の活用の成果が一部見られた。一方、習熟の必要な「数と計算」領域では、区平均正答率を下回っているため、反復による習熟に課題が見られた。
	音楽	<p>学どの学年もすすんで音楽活動に取り組める児童が多い。</p> <p>歌唱…発達段階に応じて伸び伸びと歌っている児童が多いが、曲想に合った歌い方を工夫して表現することが十分でない。</p> <p>器楽…技能面に個人差がある。</p> <p>音楽づくり…音楽づくりの経験が少ない。音楽の仕組みや構成を考えてつくることが難しい。</p> <p>鑑賞…鑑賞を楽しみにしている。〔共通事項〕などを手掛かりにして聴く経験が少ない。</p>	<p>歌唱…曲想に合わせて歌い方の工夫をすること。</p> <p>器楽…技能面の個人差を縮め、演奏を工夫するための技能を高めること。</p> <p>音楽づくり…経験を積み、音楽のしくみや構成などを考えて音楽づくりを楽しむこと。</p> <p>鑑賞…〔共通事項〕を手掛かりとして音楽を聴く経験を増やし、言葉での表現力を高めること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 思いをもてるようにするために、曲の雰囲気や特徴に気づき、感じ取らせるような言葉掛けを工夫する。 個人練習の時間をとり、一人一人の到達状況を把握して支援する。 発達段階に応じて、音楽づくりの経験を増やす。 〔共通事項〕など視覚的に確認できるように教室に掲示する。 聴き取ったことや感じ取ったことをメモしながら聴き、楽曲全体を通した感想、または紹介文を書いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「～な感じ」を言葉で表すことが難しい児童がいるので、選択できるような言葉のリストを作り提示した。 児童自身が課題を見つけて練習に取り組まれるよう、個人練習に入るまでに、練習のポイントを具体的に提示して、練習に臨めるようにした。 〔共通事項〕は、その都度例示するようにしてきたが、一覧にして教室掲示を行うことで、視覚的な理解が深まった。 鑑賞の仕方が定着してきたので、引き続き〔共通事項〕を手掛かりとして聴き方の指導を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 歌唱、器楽ともに、どのような演奏にしたいかを問いかけていくことによって児童が意識して表現に向かうことができるようになってきた。また、個人で練習ができるようにタブレット端末で練習用に作成した音源を聴けるようにしたことは、有効であった。 協働学習支援ソフトで個別に録音した演奏を提出させることで、評価がしやすくなった。 音楽づくりは、タブレット端末を使って作業することで楽しく操作して取り組むことができ、有効であった。今後、タブレット端末上でつくったものを実際の演奏に無理なくつなげていくことを考えていく。 鑑賞は、聴き方を学ぶことを意識した。漠然と音楽を聴くのではなく、〔共通事項〕などを手掛かりに聴くことを継続して取り組むことで定着を図っていく。
	図画工作	<p>学</p> <ul style="list-style-type: none"> 造形活動に自ら取り組もうとする意欲が高い児童が多い。 各学年で、予想を超える発想や、発達段階を超えた表現をする児童が散見される。 図画工作科の内容について、他教科等で学習したことや生活経験と関連付けて考え、鑑賞したり、発想したりすることができる児童が増えている傾向にある。 特に高学年で、発想・構想、あるいは面倒くさいということで、表現活動が滞り、主体的に造形活動に取り組めない児童の状況が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 興味・関心の高さを生かし、さらに造形的な見方を新たに発見したり、深めたりすることができること。 児童の卓越した発想や表現を、他の児童に広げようとして学習展開を工夫すること。 造形的なものの見方・考え方を広げ、深める表現活動や鑑賞活動を重点的に取り入れ、発想・構想力を高めること。 造形技能のつまずきに配慮し、基礎・基本の定着を図りながら、意欲を高めること。 	<ul style="list-style-type: none"> 他教科等での学習や、児童の興味・関心、生活との関連を図った内容を重視するなど、年間指導計画の改善を進める。 タブレット端末などを生かして、個人のなかで深く見たり、友達の考えと比較して考えたりするなどの学習過程を工夫する。その際、主体的かつ能動的な造形活動を促すために、学習環境の設定に重点を置き、学習活動中の教師の支援はできるだけ少なくする。 作品など比較して、違いや共通項を見いだしたり、友達の考えを取り入れたりするなどの鑑賞活動と表現活動を一体的に取り上げ、一層の充実を図る。 基礎的な知識や技能の定着のために、機会をとらえて繰り返し題材の中に意図的に取り入れたり、全体や個人指導の場面で繰り返し取り上げたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 第 6 学年で国語「鳥獣戯画を読む」の単元の実施時期の直前に国語教材の鑑賞の題材を取り入れ、「墨で表す」表現題材につなげて理解を深めた。第 4 学年では、社会科の地域の産業の内容や道徳科の「伝統と文化の尊重」の内容項目、さらに版に表す図画工作科の他題材との関連を図り、文様づくりやステンシル技法のふろしきをつくる題材を実施した。 タブレット端末での資料提示や検索機能の活用、書籍や掛図などの図版、実物大の手作り教材など、児童が必要に応じて選択して学習できる環境を設定し、指導に生かした。 美術鑑賞教室と事前・事後の鑑賞活動で、感じたこと、考えたことの根拠を明確にして話し、聞き合う活動を重視している。同様の考え方は全学年で実施している。 前の題材での造形経験が、続く題材の中で用いる技法になるよう計画、実施している。特に木工作や、版画などで効果的に生かされている。 	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末を、発想のための情報源や、発表ツールとしてなど、表現と鑑賞活動を一体的に取り上げる学習活動において、有効に用いることができた。 第 6 学年の「風神雷神図屏風」「鳥獣人物戯画」の鑑賞では、他の資料とともに、手作りの実物大の屏風、絵巻物を有効に用いた。屏風の世界に包まれるように近付いて見る、照明を変えて新たな見方を発見する、絵巻物では絵を動かしたり自分が動いて見たりするなど、身体感覚を伴う鑑賞活動ができた。 版画や木工作に関わる教科内の題材や、他教科等との関連を図ることで、児童の学習経験を通して得られた知識・技能がつながり、造形的な見方や考え方が広がった。感じたことや考えたことを、造形的な言語を用いて伝え合い、深める学習の充実は今後の課題である。 「造形遊び」の題材を重点的に多く取り入れたことで、児童が材料や場、他者と主体的にかかわり、材料の特徴や空間の変容を感じたり、造形活動に積極的に生かそうとしたりする場面が大幅に増えた。

<p>特支</p>	<p>学 自分の思いをもち、自分なりの表現で人と関わろうとする姿が見られる。本の読み聞かせが好きな児童が多く、学校図書館に行くことを楽しみにしている。定規やメジャー、はかりなどに興味をもち、友達と教える様子が見られる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・伝えたい気持ちや表現力を高めること。 ・個々の障害の特性を理解し、一人一人に合わせた個別最適化の学習に工夫をすること。 ・音や周りの動きに敏感な児童が多いので、学習環境の整備を行うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会での司会や、誕生日会などの司会を通して、みんなの前で話す場面を多く設定する。また、緊張する児童には、短い言葉で発表ができるヒントカードなどを用意する。 ・児童の興味、関心に合わせた教材を準備することで、児童が主体的に学習しようとする環境を設定する。 ・パーテーションや、ICTを活用し、視覚化・焦点化・共有化ができる教育ユニバーサルデザインを取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・8月のスピーチ活動や、9月に特別支援学級同士の学校間交流を行う際には、Microsoft Teamsを活用したことで、視覚化と焦点化に効果があり「話すこと」「聞くこと」の学習に有効だった。 ・集中力に配慮し、個別学習の時間、協働して学ぶ時間、振り返りの時間等の授業展開の見直しを行った。 ・10月に言語聴覚士によるアドバイスを受け、教室及び学習環境の整備を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間を通して行った作文指導では、作文メモに自分が見たこと、聞いたこと、感じたことなどを教師と対話しながら書いた。また、タブレット端末で撮った写真を元に、場面を想起しながら書くことで、文章で表現することへの抵抗が減り、表現する力が高まった。 ・デジタル教科書や、デジタルドリルを個別の学習に使用したことで、個々の学習の定着について確認することができた。 ・ユニバーサルデザインを基本に、教室を整備したことで、児童が落ち着いて学習に取り組める環境となった。
-----------	---	--	---	---	---

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト、デジタルドリル等から見える学習の状況